岷江入楚

横筆

37

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

横笛

四十九歳　薫君二歳

二月柏木権大納言一周忌六条院御誦経給事

朱雀院賜筍野老於入道宮給事　若君握筍給事

源氏見宮御返事給事

秋大将訪一条宮給事

御息所対面之事

女二宮引筝給事　大将弾和琴給事

贈物笛之事　笛之事也

大将帰家殿夢見右衛門督事

大将若君嘔吐母君服豆給事

大将為衛門督被誦経弥皇寺事

大将参六条院給事

三宮こ川からかくさゝゑ句宮こそし　三宮すなかやかし給

と御方ふましゆるし

大将宮抱之事参女御御方給事

大将宮見若君思出衛門督事

大将六条院語申一条宮御事給ふ

又語申笛事

横笛

以歌為巻名

秘云詞ニハ只笛とあり歌ニ

河云横笛のしらへハことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね

哢云源氏四十九才の時也　薫二才也

秘云源氏四十九才二月まてのこと柏木卒ハ四十八才の秋まて

の事　薫二歳白文之歳なりといへり　異同

箋云横笛者の笛也横して吹物をハ笛とも云　簫笙篳篥

孟云笛ハ滌し（スカス　スヽク）悪氣を除くなるへし

故権大納言のはかなくうせ給ひにしかなしさを

秘 かしハ木の薨をさすおのおのあはれかり

孟 かしハ木ハ昇進の次第をいへり故ノ字班固伝より出たるなるへく

故なる事と云へし云々可勘之

箋 大中納言にいたりて権官も正官も経しか官ハ権正兼あまた

大かたにつけてくちをし　源氏大かたの人をさへおしくかなしく

まして御心よせなるにまして　柏木の事ハ一しほかなしと思ひとし

いふそやおほしいつる　廿三歳の御事なし

箋 廿三にてはかなくなりしをおしまれ源氏の程は天下の為なりと心

思ふ人をおもはへし　求大勇者不謹小瑕

御はてにも　今年二月一周忌也

哢 去年二月薨去　去ニ一周忌く六条院令晩誦経給

よかはの僧都にもおほせらる　秘 かくろ二まし

御心のうちにハ又心さし給　秘 かしハ木の為也　箋同

行 薫の為に柏木の為に誦経をせさせ給ひし

又百両をなん　行 李部王記云天慶十年三月十九日

御八講結願左右御柏房設法事八講 参入時夕講也余條
諷誦調布百端南侍沙金百両納瑠璃等一不講平
薫大将のあまりに来大勤去進をおきせし御とくし
おとくは心もむしろく 秘 父おとゝ薫は実子ならずとも少しは知らぬ
私 致仕を源の下心をあらく唯ほ無切なると惟ひのよし
大将の君も 箋 夕霧しとりまうでとぶもり夕霧し
一条宮とても 藤葉宮もし夕霧の行ん此なるし
ちゝかたの君たち 孔梅大臣以下し
おとゝうへ 箋 致仕大臣おほしく如前し おとゝは致仕大臣は藤葉宮の母うへし
らる柏木のまうと夕霧の和まいそ父母のんしし惟るし 私箋ノ箋 然(一条宮のまうの絶
なきからにも世の覚へ 箋 あまり疎まるも柏木の覚しおほ絶えて
父母のさるゝいとしさとるなり
山のみとゝは二宮もらく 秘 女二宮なり 朱雀の心し二宮まて藤葉宮し 行
入道宮も
け庭をおもしなやましと 朱雀の後世の勤め斗とも覚え

おほしたとして 秘 女二も尼にならへいつし 箋装内
ほ おほし達ものうしらく
ぬきいくうる昔うりな 吴 昔うらゑ例
箋 女二宮女すゝく おほし御しく 時そうぬらの山里ひらるゝ人なし
給をねし今は世をそむきぬるなしる人へ
行 送筆未抽鳴鳳翼 盤根纔点卧龍文 朗詠
尋泉上山遠 有筆出林底 白氏文集
大宮日記云 延長六年亭子院より女のまつなりたまひ
御出よしのふらい稀りの大からの記さ絶ふ
詞にに冷泉院へあまりかなりのまうく讀せのひられ
世の中にあるかひもなき竹のよは數かつむとしとなるなり
花山院御製
御返し
冷泉院御製
かしいつめる竹のよをひそくしてもこの代のかくあさんとをふ
山うちかきうつぶいこゝ給
信遠寺十六に至りのまつりな給
女つかさうり替しくゆりたるをともの離人にほ為にらかけんそなし

まさる我しと向はれたところあるなりといへられは

賀縁法師　延暦比叡額御導師

是此哥ここに法ありともといふかはふりぬはりんとしたるや思

通し　　　　讃人不知

是此哥はおもしろくられはかりたる世まことに法き絶人はなかりけり

御みまかりしにうきまつて　　是此末より筆も足（きよれ

ありけり

是此山を家もなかくしられは

世をすれいりあんなをおなしこころを思もつるよ

秘　世あハまてまさ心をとりへのふ此有ゆれは山絶かしなは

朱雀院　是もかくのきて後世の無上菩提此ならはおそれ絶をとし同不とハ後世し

異　いかゝんとハ六なれ又子此道各おれ仏し同不を極楽浄土の仏

箋　世をおまはハ仕世を云しはまさるんなを出家れすし何も朱雀より世之六

おくらしたまうしおゆすれへ一仏土へ生れの人々し悪人に

まよひくハ来まさ出知しつしおなし不へ生れて　平にたろん

すりハ仏ちなしてハまさまし地なし

いとろ北まさにいろん　　箋　これもおれ仏をいひ述ぶる仰し

河　地蔵本願経云又子至親岐路各別縦然相逢無肯代受

秘　河海ニ地蔵本願経と引て如何是ハ只佛道之難解難入之心也

いさゝめ御詞なり

らいしともを　　　罍子　又罍子和名　檑子　同上　罍　音雷

又鑞王罍　遊仙窟　韓詩云天子以玉飾諸侯大夫皆以黄金士

以梓是木者皆酒器也然而我朝檀被形歟　諸食罍とまうは

酒罇也もたひと訓なり　礼記山罍其形似壷容也解割而

畫之為雲雷之形也云々　ゑりつきれたるしとて上にゑりつけ

れるきことをゆくりのひくろ枕ありしおそらくはゑるくしてるを

内ハ米藤ニハ黒藤螺鈿枕こし菓子なと入ろくし内蔵ニ納之

秘　菓子なと入るなし　河海にみえたくり

箋　罍子ハ河海にもらいしのわりにさしこそ　文ノ礼紙懸紙と云

ならふあすりれ　　箋　不及引分

秘　朱雀院此御文君得前ニ是此山ハ霞もゑしとしられてまたハ結達

おれ此の御ともかなひ　　世三もことにとまつ御すれ仏し

紀をまたと紫なれて　　お此おう仏法まうけとさうへを仰ることをもうけ

秘
あしまめらされとおもし給ふことはなり
これさへおろかれなさゆゑに　源の仰しおろかなれとおもらんし
て朱雀院いよ〳〵廿三と候りなんと覚えてしきなるに御返
源の御ともなひそめてゆへしとし
かはへのつら　出雲のふしりのそこなひのつかうまつるへし
箋 手をこなひく出るとしのつゐこしさてとしれハ此御むかしい若尺て
弄 へ尼宮ハ御出家の出損し給へるかきと源の御心にかゝれ
河於 世の中にあかぬ所ハゆへしくさそむく山路にこそいれ
源廿三巻 かるゝ世にハあかぬ所もえて入るをはりかなくらくさん
妻　秘　箋　皆周此哥
箋 朱雀院おこなひすまふ山路へ入とし御本をおりし給しこと
うし給へるひけるは所のまゝに
此あかぬ所りとしめ給へる　此六条院をとりさし世と宝をやめ給へし
弄 源の心面白なしとなり　秘 六条院をとられたる事と恨給し
いまハまかすますうりて給ひ候　廿三ハ尼宮のふと又柏木成すまじ
との所にに源にまきに成しぬなり

給をえぬへく　秘 尼宮ハしむらのかし
廿三ハ尼宮の御心をしらず源のおもしく思ふかへし
申さひとこそされうつ夢と知し
後ハ一向に後を〳〵しそのあいり源の所方よりいかにもれまて心とけ
箋 尼宮ハ御心も行ていてきぬしと恨ふの　秘 又ハ所方よりハ尼宮をぬ給ふ
出雲こそありと後てあまりに成ましとその覚悟
まうみまて　秘 いかにもあり
御袖をおしまうたり
ろうきうよりのち
うそれこれん　秘 源の御袖なり
其 唐小文ハ同じ唐ハ小文春の梅唐の織物ならんなと
一器　秘 唐の小紋し　箋 文紗なきれ數ゑ　箋 こうつかれねし
ほ様いとおかく　箋 うら地なり
うら給ひのうらきりに　うしろに紐れてくみまなのなり
おれあいうかれと　あさられたな紬し
そひやかな　上にけうつくさうつし

柳とらへりて侍りめらん風のなりかしらハ露落かしろく
河 楊柳と白色また鴨及鶴と書る也まらんさるとも鎌ん
まさきはひらうに
河 展眉物思ひなき也祢ん也しく柔和の深しと　秘 柔和之桐し　箋
いとよくおもひ出られると　秘 源の心よ柏木に似たりと也
うれきいとうやうり
冬すまや似くそせふうれ　秘 りし木し
まろ御後のうしろすかも　女三すもうれうみ似ぬとし
わかうてまう　源のまろ子といひそうてぬとし
河 うつかれ物後こハぬ父をひあのすこく　うれうまみとらうられさし
こ御しのすへハ父君れ人へしそいとまうされられうまさらぬ物とし
ひりのまめとゝ见すかなり　源のさうふれ宣ふ也
うきいらまきのしく　源のうれつとしてし
いとあはれきわうれ　何とやらんさうまぬ所のまうとし
いと宣ひとうすこそまつらうし
今よりてうとまへまされぬらんとうらん也かとし

女宮よりのしまふあり
秘 明石中宮服の文かくし此うれか良男ぬるへまとし　吴 明石服の文遣しぬうふれると
亦ゆへあひいでてくるしれを　中 柏木に似てハぬ文なりん
とるすとつくとてはなふなり
おのくれおひ給ひ清
出れさりいるとなまあると　吴 文遣は薫なると云ふし
吴 道らんとはいのちらりうり　蓋しに兄みさうりいふとあと
柏木まさに夕霧れ此お心と吹きし日当なりし心いうらしれり方ま
てハ氣ゆみいるうしと之らの句まさく口をそくまうつくお
秘 されまいはらられ　遂りいまうへいれとくし
此寄柏木まさに夕霧れましきつうハ日寄なりう心りいれり　遂
まんすの給まうとれり文まそハ氣れうしと之うかくそ口をそまさし
箋 秘 よ氣同しらうやうにおるし言とかひらくり出してそ心かハ
ゆ不寄物とこれ下寄とうるすれまおりしさると
うらそゆしき　秘 さらぬんくれ頼し
え八くまよしと　箋 まれゆまの称し

源将薫けるし孫ら書くらハよりぬ雨と
いと孫ら書くら
秘 源の将薫すし孫ら書くらとハよりぬかし筋とらひ
ゆかき四すり花ぬらかし行末にぬ文をゆへつき人ゆかむと
堂に入れてゆかてし芸為れ説なり 箋
むかしれ思向猶れすを書し又薫のおきれからとらん 京兼
若君れ行末れすを定むハ粉猪説なへし 孫ら書すハ今さて
かすし紀むてぬ文のんて付ていひすれおもらへきおて深から
多ぬとハおよハまゆら宰をひこゝるとてりけらし 仁れ
女家ものしゆふ河よなりし当へつゝ付く ぬすへし
うきふしも足れ次すらし呉竹のこハ春てくらさぬりそこかは
秘 柳木けすハ悉れらてけきとらし 類にかし
吴 うきふしも柳木けすハ 花 うき哀ハ柳木けすり竹子ハ若葉の君のこと
箋 柳けすハ尤へしも薫ハおりもしき珍猿のり 豆子三 孫子入
井けすとしつゝ 河 郭こ
河 いまさしに何生れん竹子けりきりし之書の紀世とハ玉乃や
ゆゝてるらて 箋 第とりれん 又薫とらで

秘 第とりきむん又薫とりけれそすへし 源のいつき孫人
多かと下に並ゆつとゆらくなれつてもし又第けすむその思
秘 薫けするく孫すへし
そハおりさはゆふ 芝すらくいつきゆつとおかし並き
ゆふとらんくらゆ
月日まもへて 秘 第子地なり
これ人来れいくりのし 秘 源の何し一世かるぬ宿家とし
わきうらるれ 箋 因果れもくぬすりとつり 順現
業順生業順業まり為雲けすり薫けすり深なけすりかくとし
えつられ御もく勝りも 吴 源も不倫足けすりまとこし 策よりも
秘 相合し又女三まりし如けすりまとこし
源の何りとそふ根なりまさ女方すれとおもしゆかとし
わきまけらくん 呉ふらも武くに追へゆかさらとつゝり
ふの文ところ 秘 女三文けり
そふま何りぬ不なく そふま不足ぬすりゆ紀ハ 此女三也

色なく飛ゆるしらつり　　秘 柏木女三宮の飛もし 矣
箋 蕙とある時ハ柏のなりゆゑゆるさるゝし 又女三の上よりもくさらるゝハ
冴えゆるしかくつりとし
大ぬの君ハらの江ハまいのどちぬるま　　秘 ましハ来の道ゑ纏源人
戸河ぬる絶てきのまてるなり
かれ公始く　　大とこハらりハおもしろくぬし
秋の夕れ祇何の道なるに　　秘 秋へうつして出寿物し
秋ハ夕霧れいらうん沢く色うるさ柏のなりとなさんと
出ひうらりのまふとせく季花とりつしさる無自し
帰くもえとり屋し　　秘 来思とも妨るへし
みきりりつ　　さましかへの奥へ入御なるへし
まる御との明られ　　夕霧の三条文のなし 矣
出 夕霧の宮の御夜霊并の後にゆるともおほえきとみのなし
まくまきわかそのまま　　行 多集スタキ　潜ゆえ
大の宮おたき歌くと　　夜原利基朝臣夜中物まく 位
御むら曹司の宮南りて後人へもとも母も妨りし秋の夜更てく

ねよりぬりてころ次てまことれ父れはりとよりまし
前栽もいとおろく何重もうりきるとみてくとやりそこに
御りもたしハおりひやりてよめる　　御裏書物
秘 君らり一一村はくき虫れ声の音さき歌へとも妨りまたらば
柳木君とえん一条文をとりつひのふかまに一村藤も妨りし
まりかくく虫れ声そりん秋之ひ屋ゝ方とも引合く　北
ろろへきとれてしハ未君ま虫の音そりん秋と出さうま合
て身まハ歌へとさうれいうと出より　面白し
まらにおくへられく　　秘 秋の左へわまわなり 律ハ女よられり 是也
やうかるかりつりま　　うつかれ物使に此彰まり
秘 夕霧の細しこ宮の実清かの不とハ有り
左君のつりま　　箋 つしハ木知理の上まなり
出 哀いとめつらかぬ為ハ柏木引なひし理の為し
秘 此思よ柏木の平生なりく有しのひしとし
此御理まこりりて徳らん
当てりハこりり御らんとなり 矣　　秘 女三宮の御聖の為には柏木の

ことれおゐえかし侍より　秘 御息不ノ詞 弄曰 知ぬとさへいつるよ
まして文素れおりひろくいふらはしるをこれてはかなし
む 一条のやうなるのゝ人なり女二宮のまをとれのかや
に なきんをあつれとたれいのとくおもひし月日をそめくりまよふり
背伯牙鍾子期と云て二人の琴のぬまきけり鍾子期死して後
ハ伯牙の人にまほしらしよしとて伯牙絃を絶てひかさゝりし
院の御前まうくまかり　朱雀院の御まへまてのゝし
秘 女二宮ハいたとあしよくちかさなりてゆゝしてもなり
箋 朱雀院も女宮らの御理まそ女二宮の御ことをもよしとは
さゝめもし御息不の夕霧にかゝりかしかし
私奥 秘 空木にハ夕霧の中おもし柏木よりめす
秘 まのりきいゝもとのゝ柏に　御前の小藤か原ありおくしるハ
世れりまいかしとおりひゝろて
引かた太の秀とまかる奥箋同随ハ和琴るもおもんし柏木れまと
学もまかかりろるへしとてゆりく三のふとし女二宮の琴
まいかしてゝ吟照まるくてんにれく哀とりいひとゆるれハ

と御息不女二宮れはしをおもしろくしてれのまて
箋 秘ノ義は同浅茅生の小篠か原ハ是一条宮のわれしかさゐまる絶てえり
秘 夕霧れ詞し
いとたとゆきれ　いかく世中うきものへき　伊行釈
かゝりゆまえるを
こ地くりのもみりいさし　奥入
恋しされかゝりかゝまふる世かりそはゝきと三のもく琴かゝはなし
秘 さかしされかゝりかゝまふし 奥日 かゝりもなきおみかひとるり
夕霧れ心まに二品まて柏木をそふゝとくに女二宮とそふかる 奥日
箋 引おとし琴く柏之いさし御しき国れ柏木れおかれ限かる
柏なとハ忍まんかゝかとし夕霧れ羽下に藤葉とそふゝかる
秘 夕霧れ引らふ琴と柏し屋りかして
おとハおしやう
秘 御息不の羽し
れなはさゝハ
秘 御息不夕霧に引のへてまての琴をし
琴まつかりおもしやと
奥 以來情るつまり　夕霧ハうしろを知るれるをいつり
箋 思まおりくゝ琴かゝハむしりにかゝぬ琴とや御へんとし
こゝすまわすゝめ　如聴仙楽耳暫明比巴引　秘奥箋 引し

仁 和琴貴二絃也

あつまつ中のおハ

出 夕霧の羽こしにのりと見引しやさらハ宮にいやせかせの人とれんに 箋

紹 夕霧羽更素の此中あれハ何としても宮の此琴の音にそ得らるゝとし

発 柏木より女二宮へ伝へしさは宮んとや中のおか中といへんとそ見 河海

ころらくも伝し給ひし 月宮あらさ倫し

月さし出てくもりなき空にうち羽も伝とそる

まぬかやましく宮かへし 雁不乱行之心也 発

河海 白雲にうちかへしとふ雁のうすさへかん中に秋の夜空月

秋風に伝とそるぬ雁に 秋は くもと伝へ伝なん

箋 うらやましく落葉の宮とこそや宮夕霧の心し

出 女二宮今は出とり霞の時がなれハらくいつかし

河りれことといとかれハみ 御悬不引のよふし 也

紹 和琴とハあさ給ふくお良の感に推出して箏と引やて

箋 さりれことハ和琴なとの根まこくしくいわきし

和琴箏女二宮引つゝ根に経夕霧のと向りそなと

まても女二宮とかくしなり

比巴とうりよせて 夕霧の和琴とハかくとれりにいさよせて

ますハそのまゝ箏て比巴と引ます 河 想夫恋 平調し

河り始まんと引ます

出 夕霧の想夫恋と引て宮も引かゝふ羽し其ひおもひおかなりとハ女二宮

此伝心とこそしもこうゝ此心につくやうそてとハ此由とひむつしと思ふし おか

てりしりやとこまる宮にて其うつて引 何かとし

紹 ゆふきり比巴とハ弾しめつし

箋 想夫恋又相府蓮の說あり此るしこそ未とまてに心おもし係し

たりひおもひかなるも 紹 夕霧罪下の調し 昇日

箋 更とみとこゝをとるこゝろとめ宮に給ふ柏木のすゝ

宮の身にかよへる根しと云しなきんとそてまてにかの更と

そのかりつきくなり

出 こなたの女二宮の此心中と推量しかなかハいとし此箏一族こ

ここかせのよ人なりや 発 柏木のことゝふて想夫恋まで給へしと

ゆして伝へまじき 出 想夫恋ハ女の其ゝ根にいまし曲し

発 かしハ木の給ふなかふなり

私只ことを引あらさへなり 御

秘 桜さうるまの心のあさし
しらく甚意かえし

夕顔 まに出くいふをもいひあへぬなさるとは人は恥らう筆とそのかれ
何 心まは下句のれまきへり、いふく言ふそりいひまきれ給
秘 夕顔の讀を御らくにおくいふぬは恵文意を引あらぬんで夕顔の
おし、いふぬをいひあま次の心まくとくふへあらぬとし
奚 女二宮の柏木あすに恥あらく引あらぬまん、いふぬいひあま御さ給を
云心まくさうして人をなまあとし人恥らう筆文いとし引出り
心より下句あへし

箋 まに出くハ理をとうさし人まさらまあ筆文をきはいふぬは
いふり給されの御心あうさのいよしくちて御とし
等ら心得つるなと

箋 今れあまく末つらことをこして引あそし
秘 示れ末つらし
冬 女二宮和理をとりて恵文意の末つらこといふさして付のよろし
日 和理をとり出して

近衛基熙 深き夜のあわれならりい実に分をおとよりおまえやいいもされ
冬 女二宮れ返あし理の為にかうあにさしれ相をそれうハさぬとし

奚 大きみれ附意まこ感しかうらとことよりあまこそ おくいふて
おもんいふぬを御さらといふ心まそていかしとし
秘 大きみの附意を感してらく示れ末つらことも引よりあれの心は
なしとし下ノ句れ笑 奚とは同し

箋 深き夜の何いまいハ月さし出かうらいはうの意のさらさむ出秋
風なとの附意れ感し一ちの哀をとまおせハ哀ハうあま給し心まは
けうあされともさ変ふまは延られぬとし
不 是も恵文意のあらし

秘 恵文意のありし夕顔れ心あわし絶えく心つかし
れまあかりもしいつりそれとあら地人の心し見てと云ん
あ給地人の心しめらく
秘 夕顔れ心なり
私 和理をハ柏木

うらめしきなまらく
夕顔れことを欲ふなり
思ひくしさ給さ御く

箋 是ハうらうゝ心さきるく風流め純さるとし
私さ御く私きいふとハ和理比巴を夕顔れ心きしるらん

むらしれうかんやと
秘 うしい木れるすし 奚
芭 取出向聲のあくいふう絶られ唐きるすといふて

此御ほといふもれ云ゝ人うゑては
箋　夕顔の宿にかゝらん時も今
思ひなしくゝらん世のよへしらぬ人うへはかの給へりと
うきたく云しわけしれ出てするも見えしより
むさくおぼえとも　光も理とりきくいふかん蔭葉のゐを
まかるをはかるいはれとし
こよひの御さきりは人ゆるし給へき　　出　人ゆるし給ひわ
とは廿二夜の御よそもほつへしゆふへの風にはりしすまし聞ゆへん
いつくといふまじくは夕顔の詞と
松　某ゟ此しるべ説めき絶くしくしきとさへ思ふなと云詞を請てし叙の
義さしにた給ふまじくしきも人ゆるすへしと某ゟ此の理りぬまし
呉　御息所の御
の極も人ゆるすくしとしは人くしれそふすして給れ　禅閤云夕顔の御詞とゝ今夜の面白さにたゞ夕顔
私云人ゆるしさるを前ゐれとく夕顔の羽去のおもし給れて
玉の給と云はいつきまり理の義まて以へ給ひし又云光と御息所の
詞に急ぐさくし旅の面白さにはゞ夕顔のてもまてかの言も
人ゆるへきかいふへかうりにまゐりしておもけくも　夕顔

此引給へ玉の給ふせんかとし御ゆや此時なる急にてて
只義の上の給もわうきぬとしらんとてはおかりぬと云つへ
可給ふ光ゟ箋　見集　私呉苑の後の義見ありも叶つりと絶く
あさけきさ御くしりまくも此紀世の連めかゐと夕顔の宮人は御
息所の返事にか御ありの思まくしし　さは誰も思ひ給へん　此下呉箋光一紀
そこそとゆ紀　松　いかしへかりにこの御心されゆるし
夕顔の詞御物語にこひまゐられゆるし
私此段若に呉説の難たるかた吉野へは此息所の詞し箋はおほえり
かゝ京とゆ給くこうすまらけく
玉の給にせん　松
川の給へく以太ゞの此物語のさまても此程のかつりまてはとも
あそれらなれと玉の給ふせん
りにもきまれしぬわうとし
うゝ京とも給はまりうけんとゝまてはことされは詞ぬしとし
私光も先猶のことし此面段秘要の義が遺すり先段の程と
明し　秘は不及り常しん
御おかりぬにまさとらへて　別に猶ぬとらへさうすぬ御下　出

これはなんはかりにあはれなるとも　御息所の詞おに夕霧の詞也

此琴はもとこりうく御りやしにと羽と語り此女の来ても

此笛の由来を源の宮にて陽成院より伝へたりしをしるしとて

玉　ふかく女房の笛ならんも似合ぬ物なれは今はこゝろみてくれなり

向秀過山陽旧居嵆康呂安隣人吹笛　作思旧賦

くはしよりき也　遠き此笛はうつれはふしてありけると　今此笛の音は大ぬのさ給ふ

御さきまこえさんとならん

よ思はあらそへるきとしてこきかよふはあらそふて

秘　御さかの夢はわかれしく笛の夢のせんともりめりし
ほし　呉笺

あはりりぬ随身

秘　似合ぬ随身とは夕霧の中ますて笛と随身にしてまうつるへし

むつ　御前の夢にて御息所の宮へまつこさらく

秘　前の夢の時ゆり付て随身とはゆり身にきてらふへきもはかくと也　呉笺

よきぬ母は身にもろへく

笺　前の和琴は対してこれもきゝしとそ

秘　し末の秘蔵也しゆそとし

これか為のかり

笺　此笛は宮の為のた限とおりうく吹かきそすはうなくぬし　柏木はのちし

秘　前東向背の宮して今もひきはらし

おもろん人の伝へてしかれ　笛とよくいひて吹ぬ人とよ

此笛をあ伝しうきとひらしとなり

らんおきてうちまらする

盤渉調なるうかりは盤渉の調子なれとも

ほ　むすとおもふにまかりこはさても非さゆされ御かまりこれはなかゆく

ひとりとは理をはあなへきしまをうつは昔の右東向背の笛の

あすはうらへらまんはまちゆうとし

秘　和琴とりしては御うされ御かへし此笛の音はなうえ吹ききさこ

うしは本に中もし秘とましくし

異　柳木と思ふふまりて和琴りしては御うされ御かへし此笛と随ん

そはいうらなるり

御息所　露ふかき紀むくれ宿は一つ虫の秋ちらぬもしれしあまうれ

呉　御息所の奇し

秘　笛とのるかしくて譲りぬし八雲も言くと義せのかへり　笺

玉　虫の為の笛の為を思はるし八雲御抄にも見れ御ありならし　文選

長笛賦云　蜂聚蟻同衆音猥積　云々

夕霧　よこ笛の声は人にたまにかりしぬともしくかまし孫をもつたさね

行
横笛一声天地秋

異
しきたへの袖もしくかりしといふて

似
かしこまりの御衣の高名は友そほとされぬし

箋
笛は中の宛雇なるしされともむすしくかりしといふもいとあはれ

是も夕霧の詠身かるといふ

然
国史云仁明天皇承和元年正月辛未内宴於紫宸殿是夕勅授正
六位上大戸首清上外従五位下清上能吹横笛故預此恩賞
今案横笛二字のおもむきしくなりし其笛の音に詠なく
あくまでより

叶ありむかし
作者なり
夕霧は藤原氏かくれよし雲の居まへの

秘
雲井居なり

移る居りまく

行
いりと詠といふ事の山のおとに
いまと詠といふその山のやわらかなる
うちやらくゆかるかまや

似
催つると出し

異
見河海いりと詠とうてふめす
催る呂姝と詠

私云只に雲井居也西海

箋
あはれいにしへもれからいふまさしうさはかなりや
夕霧と雲井居と下の氏藤原夫人と
こよひの月をみね雲も

秘
雲といふ時猶しくといふへきをとりとはまさし

是
雲とりまた時猶し
ありあく帰りけり
秘
名おもひぬ

かくりおもしと二夜といふかま
秋の夜の月に出居るく

似
移くあはらんさへまつ秀

秘
秘并箋は常河に仰し
字五のひかま

箋
中ちつね根なり
思さられいそけるく

秘
夕霧の中子さらなり
まつ示れさ向

秘
一条院なり
これ字にそより吹

おくりれの筆なり
いろれそ成君

是
うしろ未れ女二の宮をおもひおはしまし

しきま未れ宿まもいれのはさかしといへり

見おくりせんるをそ
ちりてはいらし

異
御らられ君くれぬとし夕霧も藤原とかんとあれとは柏木の
居りまうしくかましくしんと也

秘　世間萬変如此物也

大かたの世中につけても

かきりなく中て見んおもへりさるもあはれなし

大かたの世中につけてハ世の中のいひかしうるさくつらき

ある事のきはのものしされハ藤葉の浦ゝのあはれぬとやかなしひ

されハさかおもわんとや

まつ御中の

雲居雁と夕霧との中也

おこりたひ給へるも

夕霧の貞心なく此見る女の方は

又女の方のかきまゐりて雲ゐのおこりえんきとかゝと云し

なましひかきてゝ我執所まかりのわりきてまし雲井雁かこそ

御心まかすてしえんしのつらし

まこと若かり給へる蓑ま

夕霧の蓑にかなり

身よりまかうつゝれからきまさしこ

柏木病中ニ若面の極也

蓑れからみも

夕霧の蓑んなり

ゑつくりしう

夕霧のかくし笛の竜

笛の竹（若中ニ柏木家）のよるかものことかハ宿のよろり奥物まつてくゝかん

おもひの情の若中に中くらあかしそのさこめことに仰りさうとは

女二の宮ともうし給へとのかわや

若中中柏木の家し此まゝへのよく風まつころ所まかりハ歌のゆま

かく人給へさきてとし

風ハ只息まく吹所し皆風しことをまつハとハ声律そ吹竜の節ま

付く吹人給るしきのまく吹けハ歌う給へんとそ慈ま給へ

末の世なりきとて慈の方へ給へんとそ吹人のきかにまて根も心ころそ

まに笛まゝ女二の宮まとも不て給ん

若竜に女宮の女宮をまとめ

ハことに

おもれしとくまつしめまきに此まつれとかのいてし

ごらんとそまてをとに

そのゆくきとも蓑のまに夕霧の四人とそふし

此君ハいたりきけめのかり

夕霧の蓑をそとさ給ひしうち若君し

けふとかとし給へハ

哯吐ツタヽ

順和名云　哯吐ツタヽハ

小児口哺乳冷想不調所致也

今案小児の乳をはきもとす

哯吐　唐韻胡典切小児歐乳也又不觀而吐

うへも御こゝろまて

雲井雁

みてんさましく

袋を草まるさるしいやしまさ給し

雲ゐ居れ祢なり

いとよくこしく　　　　秘　雲井居なり

御ちかいとらくらかくと　　哭　乳のおさゝなり　秘

うちまぎらしかをしるく　　箋　夜半れるし

子細のまうもとし大掌命のそまうまし　　秘　雲井居の羽し

なりまし事にとてうらすれ　　箋　落葉のうするひくさゆなり

いまかんし把帋をさゆの

うこちなし婚へるなり　　夕霧れさゆなり

うらゆしのく　　夕霧れ羽なり

あやしの袍の三方へや　　子れおやまぬかようらなかりた

いふり婦くゆくともそ

悔と嘆しうちやりま寛ぐし　　秘　雲井居の羽し

いとやむ祢　　むさと三ゝ新かと女のさやう

かれハさほうまそうてうくれぬて

またにこの君なつこそむかり　　行　頻十仏

祢まそれよりかゆひぬふるうし又木れ萬のまゝりしま依く　　万葉し

なふとみくおそえれぬって

人の心とめく　　箋　人の心晩れをとしめつるぬそ給人の心

ちうふうく西恋のゝまとしさしてこれハ女のうこよりれれ給

なれうし又木れいうそうふるんとて

彼いまうのとろめよ　　源氏の一念ま生を処ハ定ぞといつり

おさきうりあさまやり

行　ごらめを閉眼の時ぶし源氏一念生伝是定　　柏木れ葬を仕不まや談人の葬てし　箋　おもしき

貫之集云世中仏ほとく常れ仏らせさうまつれし

源氏君能たれ辞ま仕哥とうんまてお入りけるみつさ縁ま為

おりうりくむるしくぬりまなりまにむしよゝかゆようろ[illegible]

月うきのあうぬきうれ世まそまりなる又ゝしせんとゆうし

夕ぬおとにうやにゝれ心おうゆうさく嵌りてうれおくりまの

又つまくよまくおさきま誦絶さむらく何の哀まるやうせなうとそ

柏木の弟とうく物依の寺へ

みうれなよせれるまそ

秘　設仕の大さ方のるかとし極楽るかとに准ま哀衰歳とまり

うちまちま仏の称ま　　僧ま施やんもゝいうゝゝし

箋
誦経の布施よりとろくも名わし又人の乳母まさく候人
しつそふ物なれハそれも召のまかりあしきこと
注
唐保四年七月村上天皇六七聖忌小野文被修諷誦　和琴横
笛箏為衆僧布施又三位諷誦草云有一龍笛蓋布代名物　とと
六条院より　夕霧源氏宰相し
女御君なれくに　秘　わしれ女御し　忌
三宮にいらりわく　秘　白宮し
注
三宮も白宮わすし女御の御方にまし御座し
こなたにも又とりおくく　秘　紫上なり
呉
三宮ハ白宮とて紫上の女一宮ともお様子にまかすし夕霧紫上の方
参りのふなり　秘　三宮大ねとまよひくわのまふし　宰
大ねとて
宮にハ純子まりく
注
三宮わ承との御ふて
あるきんへいくおりせ
ある宮ハ人の宮わ御方とさ西の対
ましゆるし
私云昔ハ源の女御の御方まし御座とさうく
夕霧わ紫上のつく人参り御人ハ三宮わいさきく女御の御方に
源の

おいて忝わ行の人とわのまて花鳥の装ゆる、
呉
えんりかしこ御りく　三宮もこしかしこ御りまて
秘
承香月と御局とあつしけつまて宮にて
うちつしひくおくらしすれ
見たまふすへとたまふらん
いとぞゆりくらん
とて宮とに拝くなす人きこし　夕霧わ出前とまうらんすなる御前し
秘
夕霧わきさ母なり
紫上の方わおまし人なり
まんなかいうくさん
大ねわかとへおもんみ根さかくさんとし
箋
承とまる親をかくさん夕霧わ人のかしとしおさ親の弟と　呉
私箋人の装めの秘事の装なる
これこ行も　秘　わしの女御の御方へまかりてわたし
二宮ハまろ君と配りては
行
女三宮とてわ中の猶明石女御の御方へ出方まで御
六条院わつきわ方紫上と東の寝殿　秘
注
二宮ハ今上御子輔仁式部卿若君ハ薫大将
此宮君ハ葉わまし入にん宮の御方まて宮と申ひまして
是とほわれてに
大ね三宮とていとかれくせさくさとのつけまし

かくしにまいらせけるにて
あまたありけるやうなれは　白扇のいたくこかしたるを奉りて
流もならんかしく　源なりけるのあふきまいらせし君也
おかし風情成ならさりまいりけると　近衛大将し随身も近衛府役也
なれは私の随身にやりて
（秘）西国きぬ夕顔の時より数例あまたありけり
これよりにきはひや　（弄）三位の御子をもいさめ給へ
わのかたちまさり　二条わたりの御殿おかしき所
ていふにておされまへ人のならしこなたをきし二条院にて
うちまもりて
六条の御所なり　（秘）源なり　（弄）
まいらせ給ふを　（秘）源氏夕顔の方にまいりし　（弄）
夫の事の君也　（秘）源氏宗の心にまいらせたり給ひたりし　（弄）
（秘）薫ゐまいし女三宮のかた君なり　（秘）かりなり　（長）
夫のかの君なり
夫のちのつらにをまして返そへし　（養）源の御中し
右大臣のかたちなれはおほくの別のかたちをみをましきかた

として給ひて　柏木のを取そひて女三の宮の心の思なり
ひとめ給りんとさらぬなく行ひとのかた
（私）源の御姉夫人の座りにいとおしくいまし返されは
女三の宮のかたちゆゑ給りんとさらぬなくいとおしとみるめる
けにもよく見えおりれと　薫のかとし夕顔のいまこと乗見ぬと
二あひのなかしのかたり　（秘）河海にみえたり
（河）二藍直衣の上をはなてといおされなき人に衣裳といぬを給く
直衣かりとあやしく見えし常の行ひつけたりしなくし
おさなき童の見とも直衣とみえし　薫二才かりの時のすし
（異）（秘）四薫二才まくなすしめて　一番あつれな時の直衣は指貫
ひとへたをはこれしくちいさきくもかのつゑと小袖の
狐菓あかりて云はなはかれともの直衣とそかれぬなし
なのめとゆの　（秘）夕霧の柏木のにそひなからとめつかし　（長）
まれこゐかて　（秘）眼中し
（養）又眼ゐとうけ書
今まこうしたまり　かれかは柏木よくも眼まで精のゆへし

いとよくおほしめすり　むかしの朱れ目つきに似たるを云し
おもいう次　源の慕の柳木よ似たると慕しとあむしとし
えしうしふ歳よ　うしい朱れ子を於慕したふかすし
ちうれたしのさふり　秘 従仕大臣なり
ことなの書いさくふ　河 子なり
いさいかく　秘 夕霧れ心よりうらくしふるのまつし 弄
心さへさえ　ふかるれ心さへよしとし
世の君うり給ひあれハ　秘 紫の御かたて 弄
よ人従一条の文　秘 夕霧れ源へ御西殿かなし
わかうく　秘 夕霧れ世をき心とふるのまてし
むしれとハ　秘 ふかきさりけんいつしかよなり 抄
皮さうめまんれ心さへハ　家 是ハ源氏よ夕霧れ一条文まてのま
怨りもの文ま女二つ文れ防りぬまんれ来つるを防けがり
まても防り定れのするすや秘れを源氏の批判ふまう
恋更意わりかしに男えをくしそ有恵せあれ心そ
秘 源の御心ゆとしに気まかるつき行らんるをうとし

是 源の御心いかし一への書めしにもとハ恵更意の心よや気ならつき
打うちくもしき更意の申来りやいかしへのるをふえう
女なた御人の心かつかいふり　藤裏葉の恵更意ハまつえ川
すらかくいおより八おもりうと　源の男と
るありしうれ心さしとこゆまんに　秘 夕霧を散く源の宮ふ流 弄
人ハ志るまぬとかくハ　志るまぬハおもしんぬそ畢し
志り稲くるとるるかなより
おなすらハ心さまりて　柳木れ遣ふをかるふしとの藤裏葉
の文への意なすハ風流の心なくく雑かへしとと
さうし人れり人の御おしもうハ　家 是ハ夕霧れ世女ほふうし
さしいかよりかしし源氏君れ人のうえれすハめしとくふ給へ
ふも御身のうへのすハさふふかは　ゆしきこそ
秘 夕霧れ事中し源の御身れり人すくハさふあかる
何の恋れ給へん様つ世のあかれをを
秘 夕霧れ姫し太うの世ありすぬおもれきをさうらひかいから
なると心らしうくとハ中様つとしてハとくし

ならく御らんしてそ中くよそのつまの事んき、けりけれは
花 上は何とも心しらぬはらさし そゑれはくつきこ風志句と
源氏君は空つまに付てならくの御らんとは浮しうきしと
そまへ達なるを心うしと紀とよりて
秘 今あめしくるまは 給白人つきとかむつきとて
箋 きんたうは 姫娘ゆひあさしうつすし
けり物まんたさしるく 英 さつりはるん給てこそあめ
さのえいたさし人まよりさしによりさるとよしなし
秘 夕顔はさ給んのよしまして引のつるはれしあくかなすし
秘 ましひなとし由りしいとうまりひろまし中し給りは
年の程もさのまゝしひのうされはしかくもくるしかるへし
箋 藤葉は中る齢のうく又そよみのなとはかなとてよも夕顔は和ある
又あされうましく思紀しくしさ家し此
秘 家うちは実法なりまうく法ましうは是あらかとし
私藤葉の此年もまうかしに生れの実く家所まうへの
ましいくとて給るつ御うしに左うかとし又の花よ

夕顔は実法まく風流めかぬ所よ語まし（か）れ解るとこれ
此女箋めす紀何のつき藤葉は実法なるやく て秘ん
箋 夕顔はく御されてなるは女之御事も年ふかる根ふそうら
秘 まこしらく姿りよりぬのく波ありけりと
まこしらく集りけ御らく夕顔は源氏の御前上手にあらすへ
一条内息不のおくり御手筆をまりし後柳木は若きまんへ
秘 あまと読つるるをもうけかりて
波あきる筆れすかなり 箋 源の心し
おはしわすれ
秘 源この筆をまもひわふかなり
それ筆いてにかるへき 秘 是よりは源氏は説始付し
られは陽成院の御筆なりけれと家式部口実
同 此式部口実誼人は陽成院の御くとあれは彼皇子と元良は
元長親王 二不式ア口母王氏 元利親王 三不式ア口母同 両人
之間无他此人々強姿絃之名誉不少知何 東之南院式部
口貞保親王変无此大王孫竹之長者陽成院御弟也无有其

寄ん　又云此式部卿宮ハ槿斎院父相並御門御弟宮也彼ノ
貞保親王ニ擬セらる
（注）南宮式部卿ハ貞保親王ハ笛之達者也　清和之御子二条后陽成
院之御弟也これを紫上の父式部卿宮にあてらるへきにや
かなふへき故ありとみゆるはなり
（秘）桃園なるへし紫上に紫上の父とこゝろえ紫上の父ハ兵部卿
也　故式部卿にていふへき事なし
（長）貞保親王也　見河海ニ　桃園式部卿にてとく萩の宮なりとして貞
保にゆへくはあるまし此所ハ清くも如此にて　又云此陽成院
桃園を通ん花亭式部卿ハ紫父宮故ミ代々蒐支めす
（箋）先帝の式部卿ハ紫上父宮ニ准セらるゝ事故ミ桃園ノ事之
萩のみん　（河）式部卿ハ又萩の宮此まへの義ニ
（長）桃園まて宮あるしと被ゆへし
女れ也ぞ婦くもゆるしんに　御息所の母義にさるへきの
重宝とも知り給ふへく也さと源氏君へし
此世ま御くハ又いふへきにとふハ
（秘）源の也し

（注）夢中の事に笛竹に吹よる風のことならハ末の世なかき音に伝へなん
伝へなんと思ひしかと
（箋）源の也を此笛を篁く伝へしを見きとといへり
この君もいつとわき
是れ御宮にさつき給ま　（秘）夕霧も此也を伝しと源の誰も給へし
ことまそうらいつく貴し給へこと　是より夕霧此也し
おもうこつ給しく何ひあらせと源の見定御まへのまへにありかり
好まくとゝめも見中出ぬとなり　（箋）夕霧此笛の事を知りかう
せめくことなるへん　是ねくとい事而し柏木の夕霧より
いひおきしことのかなり
今もこの後おもくま　（箋）笛をよ池次てそとし
（秘）今ハ又ひ出てもやりふかくやあて
（宏）夕霧笛のまとこその次てにおのつからめしのりとて
かしこくおもひうにや給ハぬ也とも次第患りの今ハの刻に
批りのせしことを源氏に語りやまて
今ハとせし程に　柏木頭事の御まとし此更柏木中ににれり

されいよとおほせと　茶 源の心し

秘 源の心しされいよと夕霧ありめいひさつよしとて　篝火

とり人まかりうろみきて御かいりり扎㐂し抄まと　秘 源の跡し

異 夕霧れ給し　私源の給ん　已上并

さてとこわりみ波暮るを　茶 波暮るハこゝろ合てゆゑ人なりとい

笛れすゝと宮よく夕霧れ田ひ給ひつすとハきいくもいて人

なきそとし

よるかくて源とつ　河 孫真人云夜夢不須説

女れ給へといふ夢を信せる児女子情のまゝのいふなり

異 孫真人へ見河海　又けふなつほと毎

ほくましくおもひしけまうなを　源氏のなかめつゝへ弁し

秘 ゆつ夜よ夕霧ゝ出きていふよおとしにて　恐怖の心也

とおもとは又例の紙志の常法し

異 紫式部か作意とみせしとそ